

## イタリアのコンフラテルニタとドチリナ・キリシタン フィレンツェの大天使ラッファエッロ兄弟会を中心に

米田 潔弘

本発表では、まずフィレンツェを中心としてイタリアのコンフラテルニタの歴史を概観し、ついでドチリナ・キリシタン（キリスト教教理）の教育の重要性についてフィレンツェの大天使ラッファエッロ兄弟会の事例を中心に考察することにした。

イタリアのコンフラテルニタの歴史には大きな波がいくつかみられる。まず初めに13世紀パタリーノ（カタリ派）フラティチェッリなど異端との戦いを迫られた時代、ついで14・15世紀ペスト大流行、戦乱、飢饉にみまわれた時代、16世紀カトリック改革と宗教改革が推進された時代、そして18世紀啓蒙主義的改革により多くの宗教組織が弾圧されたコンフラテルニタ受難の時代である<sup>1</sup>。

フィレンツェでは1244年にドミニコ会説教師、教皇庁異端審問官のピエトロ・ダ・ヴェローナが、パタリーノに対して正統を守るため12名の貴族からなる「信仰団」(Società della fede)を結成し、聖母被昇天の祝日に軍旗を彼らに与えた<sup>2</sup>。異端に勝利した後にビガッロとミゼリコルディアとサンタ・マリア・デッレ・ラウデの3つのコンパニーアが誕生した。ビガッロは主に孤児や捨て子の世話、ミゼリコルディアはトビトを守護聖人として囚人や病人の看護、死者の埋葬を行った。言い伝えによると、ピエロ・ディ・ルカ・ボルシというラーナ組合の運搬人頭が、居酒屋で同僚たちが神を冒瀆する言葉を発したら罰金を払うこととし、それを元手にザーナ（背負子）を作らせ急病人や死体を運んだのがはじまりという<sup>3</sup>。ミゼリコルディアは現在も救急医療活

---

<sup>1</sup> イタリアのコンフラテルニタについては、

Brian PULLAN, *Rich and Poor in Renaissance Venice: The Social Institutions of a Catholic State, to 1620*, Cambridge 1971.

Richard C. TREXLER, *Public Life in Renaissance Florence*, New York 1980.

Ronald F.E. WEISSMAN, *Ritual Brotherhood in Renaissance Florence*, New York 1982.

Christopher BLACK, *Italian Confraternities in Sixteenth Century Italy*, Cambridge 1989.

*Christianity and the Renaissance*, ed. by Timothy Verdon and John Henderson, Syracuse 1990.

*Crossing the Boundaries*, ed. by Konrad Eisenbichler, Kalamazoo 1991.

John HENDERSON, *Piety and Charity in Late Medieval Florence*, Oxford 1994.

*Confraternite, chiesa e società*, a cura di Liana Bertoldi Lenoci, Fasano 1994.

Nicholas TERPSTRA, *Lay Confraternities and Civic Religion in Renaissance Bologna*, Cambridge 1995.

*Confraternities and Catholic Reform in Italy, France, and Spain*, ed. by John Patrick Donnelly, S.J. and

Michael W. Maher, S.J., Thomas Jefferson University Press 1999.

*The Politics of Ritual Kinship*, ed. by Nicholas Terpstra, Cambridge 2000.

*Confraternities and the Visual Arts in Renaissance Italy*, ed. by Barbara Wisch and Diane C. Ahl, Cambridge 2000.

<sup>2</sup> John N. STEPHENS, "Heresy in Medieval and Renaissance Florence", in *Past and Present* 54(1972), pp.25-60. N.J. HOUSLEY, "Politics and Heresy in Italy: Anti-Heretical Crusades, Orders and Confraternities, 1200-1500", in *Journal of Ecclesiastical History* 33-2(1982), pp.193-208.

<sup>3</sup> Luciano ARTUSI e Antonio PATRUNO, *Deo Gratias*, Roma 1994, pp.300-306. Foresto NICCOLAI, *Le più antiche misericordie d'Italia 1244-1899*, Firenze 1996. Francesco CARRARA, Ludovica

動を続けており、ドゥオーモに面した本部の前にはミゼリコルディアの救急車とスタッフが待機しており、入口脇には現代の宗教画家ピエトロ・アンニゴーニが1970年に描いたザーナを背負って病人を運搬する会員の姿が飾られている。1425年にコジモ・デ・メディチがピガッロとミゼリコルディアを統合したが、1489年には分離、1542年フィレンツェ公コジモが200ほどのオスペダレを捨てて子と乞食を統制する監察官の監督下に置き、ピガッロは解散された<sup>4</sup>。1260年にはフィレンツェのゲルファ軍がモンタベルティの戦いで皇帝派のシエナ軍に敗北した。この年はヨアキム・ダ・フィオーレにより新約の御子の時代が終わり聖霊の時代が始まると言われた年にあたり、ラニエーリ・ファザーニの提唱で平和と慈悲を願う鞭打ち苦行の行列がペルージャからイタリア各地に広まり、フラジェッランティ (flagellanti) ないしバットゥーティ (battuti) と呼ばれるディシプリナーティ (disciplinati 鞭打ち苦行型のコンフラテルニタ) が誕生した。

大飢饉にみまわれた1329年以降は、オルサンミケーレ広場のマドンナ崇敬熱が高まり、1338年聖母マリア像を保護するため広場にパラッツォ (現オルサンミケーレ聖堂) の建設が始められた。『ピアダイオーロ写本』(Libro del Biadaiolo Codex) の挿絵には、広場でオルサンミケーレ (1291年創設) の会員たちが民衆に喜捨をする場面とマドンナ像が描かれている。1335年にはドミニコ会説教師ヴェントゥリーノ・ダ・ベルガモ Venturino da Bergamo のローマへの平和巡礼をきっかけに、ポローニャ、シエナ、フィレンツェなどに死刑囚を励ますための兄弟会 (コンフォルタトーリ Confortatori) が創設された。フィレンツェではサンタ・マリア・デッラ・クローチエ・アル・テンピオが創設され、1423年に12名の限定された集団 (stretta) が組織され、彼らは黒い頭巾と服を着用したことからネーリ (Congregazione dei Neri) と呼ばれた<sup>5</sup>。1399年にはピアンキ (Bianchi) と呼ばれる平和と贖罪の運動が広まった。この時プラートの商人フランチェスコ・ダティーニ Francesco di Marco Datini (1335-1410) は60歳を越えていたが、彼もサンタ・マリア・ノヴェッラ市区の集団に加わってアレツォまで9日間の巡礼に参加している<sup>6</sup>。

15世紀初頭カルロ・グイーディ・ダ・モンテグラネッリ Carlo Guidi da Montegranelli (c.1360-1417) がサン・ジローラモ隠修士会を創始すると、彼を慕ってフィエーゾレの庵に集まった人々がサン・ジローラモ (正式にはサンタ・マリア・デッラ・ピエタ) を結成した<sup>7</sup>。彼らは隔週の土曜日の夕方に集まり、祈りを捧げ告白を行った後寝室に入って休む。翌朝沈黙を守りなが

---

SEBREGONDI, Ulisse TRAMONTI, *Gli Istituti di beneficenza a Firenze*, Firenze 1999, pp.19-31. William R.LEVIN, "Confraternal Self-Imaging in Marian Art at the Museo del Bigallo in Florence", in *Confraternitas* 10-2(1999), pp.3-14.

<sup>4</sup> コジモ公の改革とその実態については、N. TERPSTRA, "Competing Visions of the State and Social Welfare: The Medici Dukes, the Bigallo Magistrates, and Local Hospitals in Sixteenth-Century Tuscany", in *Renaissance Quarterly* 54(2001), pp. 1319-1355.

<sup>5</sup> 死刑囚の励ましと埋葬を責務とするコンフォルタトーリについては、Samuel Y.EDGERTON, Jr., *Pictures and Punishment. Art and Criminal Prosecution during the Florentine Renaissance*, Cornell University Press, 1985. Filippo FINESCHI, *Cristo e Giuda. Rituali di Giustizia a Firenze in età moderna*, Firenze 1995. 及び筆者の書評『ルネサンス研究』第7号 (2000年) 177-191頁。

<sup>6</sup> Iris ORIGO, *The Merchant of Prato, Francesco di Marco Datini*, Penguin Books 1963, p.320.

<sup>7</sup> Ludovica SEBREGONDI, *Tre confraternite fiorentine, Santa Maria della Pietà, detta Buca di San Girolamo, San Filippo Benizzi, San Francesco Poverino*, Firenze 1991.

ら祈祷室にもどり、再び祈りと勤行をした後に散会した。彼らは祈りと悔悛と鞭打ちのため夕べに穴蔵のような薄暗い閉ざされた場所に集まったことから、ブーカ（Buca）とか夜の兄弟会（Compagnia della notte）と呼ばれた。15世紀にはサン・ジローラモの他にサン・パオロ、サン・ジローラモ・スツラ・コスタ・サン・ジョルジョ、サンタントニオ・アバーテ、サン・ヤコポ・デル・ニッキオの4つのブーカが各市区に誕生した。ブーカの活動は府内のキリシタンが夜になると教会に集まり連祷を唱えた後鞭打ち苦行をしたことを想起させる。府内周辺からは土曜の夕方に来て府内病院の一角に宿泊し、翌日曜の説教を聞いたという。1442年にサン・マルコ修道院長アントニーノ（アントニヌス）・ピエロツツイ Antonino(Antoninus) Pierozzi（1389-1459, 1446年からフィレンツェ大司教）が、サン・ジローラモの会員の中から12名を選んで、恥を知る貧者のためにブオノーミニ・ディ・サン・マルティーノを創設した<sup>8</sup>。同年6月には教皇エウゲニウス4世（1383-1447、在位1431-47）が回勅で大天使ラファエッロなど4つの青少年兄弟会を認可している。

カトリック改革と宗教改革が推進された16世紀以降は、新旧のコンフラテルニタが活発な活動を展開するとともに、13世紀以降のキリスト教の民衆化の流れに対して上からの統制が強化された。カトリック改革の影響下に16世紀以降多くみられるようになるコンフラテルニタとしては、サンティッシモ・サクラメントないしキリストの身体、神ないしイエスの御名、カリタ（サン・ジローラモ・デッラ・カリタ）、ドチリナ・キリシタン、サンティッシモ・ロザリオ、そしてマリア信心会などがある<sup>9</sup>。またコンフラテルニタとならんで、テアティーノ会、カプチン会、パルナバ会、ソマスカ会、ウルスラ会、イエズス会、オラトリオ会など新修道会が誕生し、貧民救済や医療など社会福祉活動と教育事業が積極的に実践された<sup>10</sup>。

16・17世紀に最高潮に達したコンフラテルニタは、18世紀後半啓蒙主義的改革によって受難の時代を迎える。スペインではブルボン家のカルロス3世、ポルトガルでは国王ジョゼ1世の首相ボンバル侯爵の改革によって多くの修道院や信心会などの宗教団体が解散・閉鎖され、土地財産が没収された<sup>11</sup>。トスカーナでは1785年にピエトロ・レオポルド大公の改革によって大公国内にあるすべてのコンフラテルニタの閉鎖と財産の没収が命じられた。その結果、フィレンツェ市内だけで250ほど存在したコンフラテルニタのほとんどが閉鎖され、わずかにミゼリコルディア、サン・ジローラモ、サン・マルティーノなど10箇所だけが存続を許された<sup>12</sup>。

<sup>8</sup> 河原温「15世紀フィレンツェの兄弟団と貧民救済 Buonomini di San Martino の場合」『ヨーロッパの歴史』を讀む』国際教育課程統合研究プロジェクト報告書(東京学芸大学海外子女教育センター、1997年)143-179頁。拙稿「15世紀フィレンツェにおける慈善と教育 教皇エウゲニウス4世とアントニヌス大司教とコジモ・デ・メディチの活動を中心に」『桐朋学園大学研究紀要』第29集(2003年)63-87頁。

<sup>9</sup> Lance LAZAR, "Belief, Devotion, and Memory in Early Modern Italian Confraternities", in *Confraternitas* 15-1(2004), pp.3-33.

<sup>10</sup> カトリック改革と新修道会については、*Religious Orders of the Catholic Reformation*, ed. by Richard L. DeMolen, New York 1994.

<sup>11</sup> 疇谷憲洋「18世紀ポルトガルにおける反イエズス会イデオロギーについて」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第36巻(1998年)21-35頁。

<sup>12</sup> L. SEBREGONDI, "La soppressione delle confraternite fiorentine", in *Confraternite, chiesa e società*,

ところで、イタリア（とくにフィレンツェ）のコンフラテルニタは、アヴィス朝のジョアン 2 世とマヌエル 1 世の保護下にポルトガルに導入された<sup>13</sup>。バルトロメウ・ディアスの派遣で知られるジョアン 2 世は、40 以上の古い病院を統合するためフィレンツェのサンタ・マリア・ヌオーヴァ病院をモデルとして 1492 年リスボンにトードス・オス・サントス病院を設立した。ジョアンの死後は王妃レオノールが影響力を持ち続け、1498 年リスボンに病人や恥を知る貧者、囚人や死刑囚を対象とするミゼリコルディアを創設した。王妃はまたフィレンツェのクララ女子修道会と親交し、リスボンに同修道会的女子修道院を建設した。その後ミゼリコルディアは、ポルトガル人商人や宣教師を通じてポルト、エヴォラ、アゾーレス、マデイラ、北アフリカ、1510 年代にはインドのゴア、その後マカオなどに設立された。コンフラテルニタは発祥の地イタリアでは 18 世紀後半以降受難の時代に入るが、イタリアに生まれポルトガルとスペインを経て遠い日本に移入されたコンフラテルニタは、キリシタン弾圧と鎖国の下に浄土真宗の組や講などと習合して日本の風土にあった結衆の原理として生き延びたのである<sup>14</sup>。

16 世紀のコンフラテルニタのモデルのひとつとしてドチリナ・キリシタンがあることは先に述べた。青少年に対してキリスト教教理の基本（カテキズモ）を教えて善きキリスト教徒を育成することの必要性は以前から意識されていたが、それが制度化されるのには多少の時間と労力がかかった。コモの聖職者カステッリーノ・ダ・カステッロは、ミラノの貴族アンジェロ・ポッコの協力を得て、1536 年にミラノで道端でぶらぶらしている子どもに林檎を与えて教会へ集め、十字架や信仰の基本について教え始めた<sup>15</sup>。1539 年に彼がドチリナ・キリシタンのコンフラテルニタを創設すると、その後同様なコンフラテルニタが急速にロンバルディア、ヴェネトからローマにまで広まった。1560 年頃にミラノの貴族マルコ・デ・クザーニがローマに学校を創設、1562 年に教皇ピウス 4 世の支持を得た。トリエント公会議終了後の 1571 年に教皇ピウス 5 世は回勅を発し、すべての小教区にドチリナ・キリシタンの学校を設置することを奨励した。1607 年には教皇パウルス 5 世によりアルチコンフラテルニタとして認可され、ローマのサン・ピエトロ大聖堂に本部が置かれた。ドチリナ・キリシタンの学校は 4～14 歳の子供たちを対象とし、主に二つのテキストを使って授業が行われた。ひとつは『スンマリオ』（Summario）という 16 頁程度の小冊子で、ラテン語で十字架の印、パーテル・ノステル、アヴェ・マリア、クレド、サルヴェ・レジーナ、イタリア語で十戒、4 枢要徳、聖霊の 7 つの賜物、7 つの精神的慈悲の業と 7 つの身体的慈悲の

pp.458-462. Konrad EISENBICHLER, "The suppression of confraternities in Enlightenment Florence", in *The Politics of Ritual Kinship*, pp.262-278.

<sup>13</sup> Joseph Wicki S.J. 「ポルトガル領インドにおける「ミゼリコルジア」の組」『キリシタン研究第 15 輯』教文館、1974 年、211-234 頁。Isabel dos Guimarães Sá, "Assistance to the Poor on a Royal Model: The Example of the Misericórdias in the Portuguese Empire from the Sixteenth to the Eighteenth Century", in *Confraternitas* 13-1(2002), pp.3-14.

<sup>14</sup> ヨーロッパ起源のコンフラリアがどのように日本へ移入され変容していったかその実態については、川村信三『キリシタン信徒組織の誕生と変容：「コンフラリア」から「こんふらりや」へ』教文館、2003 年。

<sup>15</sup> Paul F. GRENDLER, "The Schools of Christian Doctrine in Sixteenth-Century Italy", in *Church History* 53(1984), pp.319-331. P.F.GRENDLER, *Schooling in Renaissance Italy*, Johns Hopkins 1989, pp.333-362.

業、7つの悪徳と7つの美德、精神の3つの力（記憶、知性、意志）、5つの感覚、7つの秘蹟などが書かれていた。いまひとつは『インテッロガトリーオ』（Interrogatorio）で120～220頁のもっと詳細な教理問答書である。前者は印刷術が普及する15世紀からイタリアで使われたが、後者はツヴィングリ、ルター、ファン・デ・ヴァルデスなどプロテスタントの小教理問答書が知られていたが、カトリックの子ども用の教理問答書が出版されるのは1540年代で、1560年代以降急速に普及した。

16世紀にドチリナ・キリシタンの教育が制度化され小教区に学校が創設されたが、それよりも1世紀以上早くフィレンツェでは青少年兄弟会が誕生し、ドチリナ・キリシタンの教育が始められていた<sup>16</sup>。教皇エウゲニウス4世は1442年6月24日付の回勅で、大天使ラッファエッロ、サン・ニコロ・デル・チェッポ、プリフィカツィオーネ、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ（ヴァンジェリスタ）など4つの青少年兄弟会を認可した。このうち最も古い大天使ラッファエッロは、1411年に金箔職人たちによって創設され、サン・ジローラモの監督指導を受け、教皇エウゲニウス4世とアントニヌス大司教の保護下に発展した。お清めの聖母マリアを守護するプリフィカツィオーネ（1427年創設）はその姉妹校で、アントニヌスとコジモ・デ・メディチの厚い保護を受けた。会員は13～24歳の青少年を中心とし、パードレ・グアルディアーノ（Padre Guardiano）とパードレ・コレットローレ（Padre Correttole）の聖俗2名の大人の監督指導下に置かれた。後者はミサ、告白、聖体拝領、説教など青少年の霊的指導を担当し、サンタ・マリア・ノヴェッラ教会で集会を開いていたことからドミニコ会修道士が多かったが、オニサンティ教会のフランチェスコ会など他の修道会の者が担当する場合もあった。

これらの青少年兄弟会は先にふれたブーカと親子関係で結ばれていたようである。ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ *Vespasiano da Bisticci* (1421-1498)は、ジュリアーノ・チェザリーニ枢機卿の勧めでアントニオ・ディ・マリアーノ *Antonio di Mariano* の兄弟会に入ったというが、このアントニオは大天使ラッファエッロの初代パードレ・グアルディアーノである。アントニオの父と弟ピエロはプリフィカツィオーネのグアルディアーノを務めている。またビスティッチによれば、ドナト・アッチャイウオーリ *Donato Acciaiuoli* (1429-1478)は小さい頃青少年兄弟会に入り、その後大きくなってサン・ジローラモに入会したというが、ドナトはおそらく25歳で大天使ラッファエッロを卒業して大人のブーカに進んだのである<sup>17</sup>。また、ロレンツォ・イル・マニフィコ *Lorenzo il Magnifico* (1449-1492)はサン・パオロの熱心な会員であったことが知られ

<sup>16</sup> K. EISENBICHLER, *The Boys of the Archangel Raphael: A Youth Confraternity in Florence 1411-1785*, Toronto 1998. Ilaria TADDEI, *Fanciulli e giovani. Crescere a Firenze nel Rinascimento*, Firenze 2001. 拙稿「ルネサンス・フィレンツェの音楽生活（VII）＜大天使ラッファエッロ兄弟会＞の歴史的背景」『桐朋学園大学研究紀要』第23集（1997年）1-25頁。「ルネサンス・フィレンツェの音楽生活（VIII）

子供兄弟会の音楽活動」『桐朋学園大学研究紀要』第24集（1998年）1-25頁。「大天使ラッファエッロ兄弟会再考　コンラート・アイゼンビヒラーの研究を中心に」『桐朋学園大学研究紀要』第27集（2001年）199-215頁。

<sup>17</sup> *Vespasiano DA BISTICCI, Vite di uomini illustri del secolo XV*, a cura di Paolo d'Ancona ed Erhard Aeschlimann, Milano 1951, pp.83, 330.

ているが、二人の息子ジョヴァンニ（後の教皇レオ10世）とジュリアーノ（ヌムール公）をヴァンジェリスタに入れている。サン・パオロとヴァンジェリスタはメディチ邸にほど近いアックア通り（現ゲルファ通り）のトリニタ・ヴェッキア教会を集会所として共有していた。1491年の謝肉祭で12歳のジュリアーノが祭りの長に選ばれ、父ロレンツォ作《聖ジョヴァンニとパオロの劇》が上演されている<sup>18</sup>。

青少年兄弟会の目的は、青少年を世俗の誘惑から守り有徳で敬虔な市民を育成することであり、そのために守護聖人祭、宗教行列、ラウダ歌唱、説教、聖史劇の上演などが積極的に行われたが、ドチリナ・キリシタンとのかかわりで重要なのは青少年自身による説教と聖史劇の上演である。例えば、ドナト・アッチャイウォーリはサン・ジローラモの熱心な会員で、毎週土曜の集会には必ず出席して鞭打ちの時に説教をし、藁布団に寝て一夜を明かした。彼は1468年にマージ（マジ兄弟会）で聖体に関する説教をしている<sup>19</sup>。アンジェロ・ポリツィアーノ、ジョヴァンニ・ネージ、ジョヴァンニ・マリア・チェッキ、ジョヴァンニ・コッキらはヴァンジェリスタや大天使ラッファエッロなど青少年兄弟会のために説教を書いたり行ったりしている<sup>20</sup>。

1582年6月に大天使ラッファエッロでトピアと大天使の物語が上演された時、印刷された紙片が聴衆に配られたが、そこには12の信仰箇条、クレド、十戒、7秘蹟、3枢要徳、聖霊の7つの賜物、慈悲の12の掟、7つの精神的慈悲の業と7つの身体的慈悲の業、7つの大罪、キリスト教徒が留意すべき4つの事柄、5つの感覚、教会の掟、善きキリスト教徒が遵守すべき事柄、聖霊に対する6つの罪、8つの至福などが書かれていた<sup>21</sup>。また、1624年1月にヤコポ・チコニーニの『天の案内人』(La celeste guida)が上演された時、擬人化された祈り(Orazione)と彼女に付き添うカリタ(Carità)と7つの身体的慈悲の業(Sette opere della misericordia corporali)が舞台上に登場した<sup>22</sup>。説教と演劇の上演はまさに心と身体を通してドチリナ・キリシタンを血肉化するための格好の道具であったといえる。

青少年兄弟会でこのような教育を受けた者の中から、やがて熱心にドチリナ・キリシタンの教育の責務を実践し、実際にドチリナ・キリシタンの学校を立ち上げる者が現れてくる。例えば、ヴィットーリオ・デッランチャーザ Vittorio dell' Ancisa (1537-1598) は、大天使ラッファエッロでドミニコ会士フラ・サンティ・チーニの下で教育を受けた後、ローマへ出てフィリッポ・ネ

---

<sup>18</sup> ロレンツォと兄弟会とのかかわりについては、拙稿「メディチ家と兄弟会 コジモからロレンツォへ」『イタリア学会誌』第50号（2000年）116-142頁。

<sup>19</sup> Rab HATFIELD, "The Compagnia de' Magi", in *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 33(1970), pp.107-161.

<sup>20</sup> Paul O. KRISTELLER, "Lay Religious Traditions and Florentine Platonism", in *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma 1956, pp.99-122. Cesare VASOLI, *I miti e gli astri*, Napoli 1977, pp.51-128. R. WEISSMAN, "Sacred Eloquence: Humanist Preaching and Lay Piety in Renaissance Florence", in *Christianity and the Renaissance*, pp.250-271.

<sup>21</sup> K. EISENBICHLER, "Cosa degna: il teatro nelle confraternite di fanciulli a Firenze nel Rinascimento", in *Confraternite, chiese e società*, pp.825-836.

<sup>22</sup> Guido BURCHI, "Vita musicale e spettacoli alla Compagnia della Scala di Firenze fra il 1560 e il 1675", in *Note d'Archivio*(1983), pp.21-26.

ーリに師事した。帰郷した彼は、サン・マルティーノの会員から貧しい女子の収容と保護を依頼され、ここからスタビリーテ・ネッラ・カリタ (Stabilite nella Carità) が誕生するのであるが、ヴィットーリオは彼女たちのために読みやすい瞑想の書などを書いている。保護された女子の中にはそのまま住み続けて、後に修道女となる者も現れた<sup>23</sup>。これは日本においてペドロ・モレホン神父がジュリア内藤やマリヤ伊賀など女性信徒を指導したことを想起させる。また、絹織物職人のイッポリート・ガランティーニ Ippolito Galantini (1565-1620) は、ドチリナ・キリシタンを歌いながら暗誦することを勧め、ドチリナ・キリシタンを普及させるためにヴァンケトーニ (バケットーニ) (Congregazione di Vanchetoni o Bacchetoni) を創設した<sup>24</sup>。16世紀のイタリアと日本において同時に、コンフラテルニタないし組や講のネットワークが広まり、一般信徒ないし異教徒を善きキリスト教徒に育成すべくドチリナ・キリシタンの教育活動が熱心に行われていたのである。

---

<sup>23</sup> Gilberto ARANCI, *Vittorio dell'Ancisa un prete fiorentino del cinquecento e l'origine delle "Stabilite nella Carità"*, Firenze 1997.

<sup>24</sup> G. ARANCI, *Formazione religiosa e santità laicale a Firenze tra cinque e seicento. Ippolito Galantini fondatore della Congregazione di San Francesco della dottrina cristiana di Firenze(1565-1620)*, Firenze 1997.